

## 「新しい共感覚」が切り拓く未来の地平を目指して

新井 敦夫

Arai Atsuo

SORA HEARTS CORPORATION 代表取締役

### はじめに

「五感に響く価値の創造」。これが、我が社のテーマであり、ミッションである。

私自身、「五感」（第6感、第7感をも望みたいが、、、）を持つ生身の人間だ。その時々々に徒然感じ、思い、行動したことの「軌跡」を振り返ってみると、その筋道が、「社史」となって見えてくるのだと思う。確かに言えることは、私1人の感覚、感性、想念だけでは、その「軌跡」は、生まれてこなかった、ということだ。「五感」は、人それぞれに違うが、何かを生み出そうとするとき、人と人との「五感連携」がとても重要で、私たちの歴史、文化、経済は、それによって生み出されてきたと言っても過言ではないのではないだろうか。デジタルテクノロジーが発達し、人が、自身の感覚を、自由に拡張できる未来が既に訪れている今だからこそ、今一度、自身の生身の感覚に意識を向け、「フィジカル」と「デジタル」を横断して、人と人、人と社会との感覚をつなぐ「新しい共感覚」が生み出す体験価値創造を通して、より豊かな感性を育む社会づくりに寄与することが、我が社の事業理念である。まだまだ、幼く、「社史」をあらわせるほどの歴史も実績も持ち合わせていない、「ひよっこ」会社であるが、「思いの実現」に向けて、波多き海原へと漕ぎ出す一艘の小舟を見守るような気持ちで、ご一読いただけるとありがたい。

## ひな形をつくる

～人と人、地域、社会とを結びつなぐアート（ソーシャルアート）の実践～

2013年3月、「シネステティックデザイン」（＝「五感のあじわい（五感全体での感得）」によって、より豊かでヒューマンな価値を創造するデザイン）をテーマに、画家、写真家、作曲家、学者、プロデューサー等をコアメンバーにして設立した研究・創造活動組織（任意団）“SORA Synesthetic Design Studio”が、我が社の原型である。

その3月は、日本の関東地方から東北地方に、甚大な被害をもたらした「東日本大震災」からちょうど約2年を経た頃で、日本は、心に負った大きな傷がまだ癒えず、公共メディアやSNSに、「絆」という文字と、それを希求するメッセージが溢れていた。

私は、ある社会貢献NPO法人の「世話人」として、震災復興ボランティア活動に参画し、アートによる復興応援プロジェクトを立ち上げた。その最初の取り組みが、2014年に、宮城県登米市で第1回目が開催された市民マラソン『東北風土マラソン&フェスティバル』（以下、『東北風土マラソン』という）と連携して、東北の復興をアートで応援するプロジェクト：「ことばを詰めて届けよう！ 想いと願いのメッセージ 『イマジンクラウドプロジェクト』」であった。



『東北風土マラソン』前夜祭会場に吊られた廃棄ビニール傘による「雲」のオブジェ



『東北風土マラソン』会場に展示された廃棄ビニール傘によるドーム型オブジェ

『東北風土マラソン』では、クラウドファンディングが採用され、一般市民（crowd）が資金支援をして大会を支え、アートでは、「心の支援」として、多くの人々の「声の応援メッセージ」（東京と東北・宮城で収録した応援音声メッセージを、オリジナル楽曲と共に前夜祭会場で放送）と「手書きの応援メッセージ」を、空間アートにして

会場に展示（「雲：cloud」に見立てた廃棄ビニール傘による造形物に、油性ペンで応援メッセージを書き込み展示）し、会期中を通じて来場者とランナーのメッセージが書き加えられて、みんなの想いと願いをつなぐアート作品を完成させた。



『東北風土マラソン』会場にて、ビニール傘オブジェにメッセージを書く参加者



『東北風土マラソン』会場のスタート・ゴール地点にて、造形監修アーティスト志喜屋徹氏と。向かって左が私。ビニール傘オブジェを被り、ランナーを応援。

このプロジェクトは、「震災惨禍からの心の復興」という社会課題に対して、「アートは何かできるか？」という視点から向き合い、アーティストとボランティア、参加市民の「想い」と「願い」をつなぎ可視化するアートによって、人と人、地域、社会との「絆」をつくる「共創」の取り組みの実践例となった。

以後、SORA HEARTS CORPORATION 設立後、このようなアプローチでの「ソーシャルアート」の取り組みを、地方での「地域活性化」、神社での「縁結び」、百貨店や商業施設での「コロナ後の3世代コミュニケーション活性」等、様々なテーマで展開中である。

## SORA HEARTS CORPORATION 設立と始動

～憧れの米国ペンシルベニア州に会社を設立し、日本国内で営業を開始～

今、日米は「鉄」で揺れている。USスチール（本社所在地：米国ペンシルベニア州ピッツバーグ）を日本製鋼が買収する、というニュースに触れ、私の心は、ピッツバーグへと飛んだ。というのも、我が社の設立州は、ペンシルベニア州で、その設立ストーリーの表側には、ピッツバーグへの憧れがあり、その裏側には、ピッツバーグという街を、大規模な都市計画によって生まれ変えさせた「街づくり」の歴史と、それを実現させた人々の想いと行動への、私自身の尊敬の念があるからだ。

ピッツバーグは、とても美しい街だ。2017年の夏に訪れたとき、街全体が緑で覆われた「公園都市」のように感じた。かつて鉄鋼の街として栄え、製鉄工場の煤煙による大気汚染で「スモーキーシティ」とも呼ばれたこの街が、第二次世界大戦後、大規模かつ先進的な都市再開発計画によって、緑豊かな都市に生まれ変わった物語が、風景の中に静かに息づいている。そして、街の随所に置かれたスチール製のパブリックアート作品が、この街とスチールとの関係の奥深さを物語っているようにも感じられた。

私の記憶に残るピッツバーグの印象的な風景は、街のあちらこちらで回る散水機の水が、日光でキラキラと美しく輝き、芝生の緑の葉先が、とても繊細で清らかな光の輪郭線を描いて、小刻みに揺れている風景だ。その光景を目にした途端、心の中で、音の色彩がゆるやかに変化してゆくようなミニマルミュージックが聞こえはじめ、街の景色が、その音色と共に、ゆっくりと回り始めた。



ピッツバーグの緑地に配されたパブリックアート  
“FIVE FACTORS II”/Peter Calaboyias/1977



ピッツバーグ街中の緑地に咲くタンポポ  
散水機で撒かれる水が、緑に潤いを与えている

その印象は、今でも鮮明に憶えている。もしかすると、世界中のどの街でも見受けられるありふれた光景かも知れないが、ピッツバーグで感じた印象が、特別な体験として私の記憶に刻まれた背景には、私自身の「ピッツバーグへの憧れ」があったからだと思う。「POP アート」を世界に広めた現代美術家アンディ・ウォーホルが生まれ育った街で、1人のアーティストの美術館としては最大級の「アンディ・ウォーホル美術館」がある街。そして、ストリートアートの先駆者キース・ヘリングが、多感期（創作活動の胎動期）を過ごした街。エイズにより、わずか31歳の若さで他界したキース・ヘリングは、実は、私にとって、特別な思い出のあるアーティストだ。1987年に、東京都多摩市の複合文化施設『パルテノン多摩』の開館記念イベントのため、当時私が勤務していた会社がキース・ヘリングを日本に招聘し、多摩地区の子どもたち440名と巨大壁画を描くプロジェクト『キース・ヘリングと子供たち』を制作した際、ご本人と一緒に、その制作に携わった特別な思い出があるからだ。余談だが、そのプロジェクトの際、東京浜松町の中華料理屋にキース・ヘリングと彼のボーイフレンドを招いて、会社のメンバーと食事会（恐らく打ち上げ）をしたのだが、その会の終わりしなに、キース氏が、その店の取り皿に油性ペンで絵を描いてプレゼントをしてくれるという、すごいサプライズがあったのだ。その絵には、社名「Sound Process Design」の頭文字をとった略称「SPD」と、スタッフが力を合わせて共に律動している絵が描かれている。この絵のイメージこそ、その後、約30年を経て、私が目指すことになる「新しい共感覚」のイメージの源泉になっているようにも感じるのだ。



“SPD”/1987  
キース・ヘリングによるドローイング

目には見えない様々なファクターが、時の経過の中で、私の「憧れ」、「目標」、「行動」と、人との「ご縁」によって結ばれ、2017年6月、ペンシルベニア州ハリスバーグに米国法人株式会社 SORA HEARTS CORPORATION を設立することとなった。

何故、ピッツバーグではなくハリスバーグかということ、その時米国法人設立のサポートをしてくれた会社が使える登記上の住所がピッツバーグにはなく、ハリスバーグにしかなかったからなのだが、とにかく、憧れのピッツ

バーグがあるペンシルベニアに法人登記をすることができた。社名頭の「SORA」には、いくつかの思いが込められている。まず、単純に、「そら」という言葉の響きが好きだ。そして、その響きの奥には、「宙」という、どこまでも果てしない無限の広がりイメージと、「空」という、いつ、どこにいても、私たちの頭上にあり、遮るものがない、自由なイメージがある。「そら」のような心を持ち、「そらの響き」（感覚の共鳴）を無限に響かせていきたい、そんな思いから、SORA HEARTS CORPORATION という社名とした。

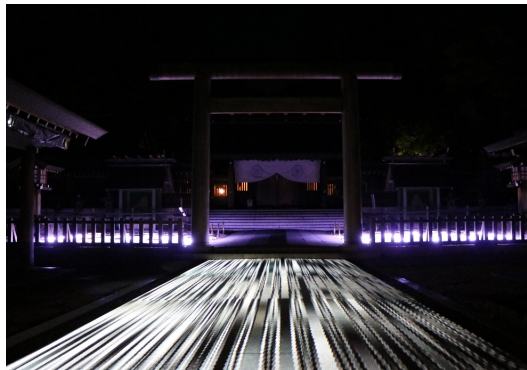
何故、米国に？と、良く聞かれるのだが、その時、前述の“SORA Synesthetic Design Studio”で、既に始めていた、人々の想いと願いを込めて完成させる参加型・共創型のアートプロジェクトを、将来、日米国際交流の文化事業に発展させるためのアンカー（錨）を、はじめに、日本国内ではなく米国に設けておきたかった、というのがその理由だ。世界地図上に、自分のゴール地点をはじめにマーキングする、そんな感覚で、「今やるしかない！」と一念発起して設立をしたのだった。そして、同年7月東京の自宅近傍の豊島区雑司ヶ谷に日本営業所を開設し、約1万キロ離れた場所に会社登記、毎日散歩感覚で歩いて通える場所に事務所を構える、という「愉快」なスタイルで、営業を開始した。

初仕事は、2017年11月、京都清水寺の秋の夜間特別拝観のオープニングに、「メディアアートの新星」と呼ばれ、パリを拠点に世界で活躍中のメディアアートユニット“NONOTAK”の

オープニングライブを行った際の、企画協力と制作ディレクションであった。世界遺産にも登録され、多くの外国人観光客も訪れる清水寺での『NONOTAK 光と音の奉納演奏』は、非公式な数字ではあるが、夜間拝観客を含め、約 4000 人の観衆を魅了し、SORA の道行きに、一条の光りが差す出帆となった。



清水寺 秋の特別拝観オープニングライブ  
『NONOTAK 光と音の奉納演奏』 / 2017 年



『2019 年日本博京都府域展開アートプロジェクト  
「もうひとつの京都」〈光のアトリエ〉  
第二期作品展示・ライブパフォーマンス』  
/2019 年



『光のやじろべえ』 / 2017 志喜屋徹+チーム・ゼロアンペア/  
スマートイルミネーション横浜/  
ガチャカプセルとソーラーLED ライトを素材に、  
来場者参加のワークショップで完成させる作品。  
暗闇の中で光り、やじろべえのように、バランス  
を取りながら、ゆらゆらと揺れる。  
<https://youtu.be/N8yiLnr6RLk>

NONOTAK とのご縁は、その後も続き、2018 年に、毎年、秋に京都市で開催されているアートフェスティバル『ニューイ・ブランシュ KYOTO 2018』（パリ市発祥の『ニューイ・ブランシュ』〈白夜祭〉に着想を得た現代アートの祭典）にて、京都国立近代美術館（MoMAK）での NONOTAK 作品展示とライブパフォーマンスの制作をサポート。

2019 年には、京都府天橋立エリアの地域振興アートプロジェクト『2019 年 日本博京都府域展開アートプロジェクト「もうひとつの京都」〈光のアトリエ〉』第 1 回第 2 期の企画制作を、京都府/「海の京都」天橋立地区協議会から受託し、伊勢神宮の元社と言われている元伊勢籠神社（もといせこのじんじゃ）にて、NONOTAK、梅田宏

明 (Hiroaki Umeda/振付家・ダンサー・ビジュアルアーティスト) の作品展示と、NONOTAK、moshimoss (作曲家・サウンドデザイナー) のライブパフォーマンスのディレクションを行った。

(NONOTAK は、2018 年に “Pittsburgh Cultural Trust” の企画で、ピッツバーグで作品展示を行っている)

一方、参加型作品制作では、現代アーティスト志喜屋徹 (Akira Shikiya) 氏と 2014 年に結成した「志喜屋徹+チーム・ゼロアンペア」 (自然エネルギーを利用し、人々の参加と共創によりアートイルミネーションを生み出すアートチーム) の活動をサポートし、省エネ技術とアートが織りなす都市夜景づくりの祭典「スマートイルミネーション横浜 2017」のアワードに作品を出展、来場者の人気投票で 1 位を獲得した作品に贈られる「オーディエンス賞」を受賞した。

時系列的には前後するが、2018 年 8 月、私が大学卒業後、約 20 年勤務した日本で唯一の「音環境デザイン」専門会社であった株式会社サウンドプロセスデザイン (以下、SPD という) が解散したことに伴い、同社の事業を承継した。近年、日本の「環境音楽」が、世界的に再評価され、米国の音楽レーベルから『KANKYO ONGAKU: JAPANESE AMBIENT ENVIRONMENTAL & NEW AGE MUSIC 1980-90』というコンピレーション CD が発売されて話題を呼んだが、その収録曲中に、坂本龍一、細野晴臣等と並んで、SPD を設立した作曲家故芦川聡 (Satoshi Ashikawa) と、SPD と多くの公共空間のサウンドデザインを手がけた作曲家故吉村弘 (Hiroshi Yoshimura) 、現在も活躍中のアンビエントミュージックユニットイノヤマランド (INOYAMA LAND) 等、SPD とご縁の深いアーティストの楽曲が多く収録されていることは、1980 年代から 1990 年代にかけて、SPD が「環境音楽」、「音環境デザイン」の分野で果たした意義の大きさを物語るものでもあろう。

## コロナ禍でのチャレンジ

～コロナ禍がもたらした新たなる取り組み～

2020 年の 1 月、それは、突然やってきた。新型コロナウイルス (COVID-19) によるパンデミックだ。私の自宅は、東京の、池袋駅からほど近い場所にあるのだが、4 月に最初の緊急



事態宣言が発令されると、駅隣接の百貨店は、一部の食品売場を残して臨時休業をし、駅前の景色は一変した。駅周辺の店舗も相次いで休業をしたため、普段は人通りで賑わう駅前に、人の姿が見えない。それこそゴーストタウンのような風景が現出したのだ。そんな景色を見たのは、生まれて初めてだった。人の姿が消えた街は、連なる建築・構造物の物質的なボリュームが恐ろしいほどに大きく見え、4月のあたたかな陽光の中で、静かに、寒々とした空気感に包まれていた。ニュースで報道される米国の状況は、さらに深刻で、渡航する機会は失われた。

予定されていたアートイベント等、イベント系の仕事は、全てお流れとなった。

我が社は、外国法人であるが故、国内金融機関からの融資が受けられず、新型コロナ融資も、申し込むことができなかった。貯蓄を取り崩し、個人資金で乗り切るしかなかったのだが、幸

いなことに、長くお仕事でご縁のあるクライアントと、企画開発コンサルティング契約を交わし、ホテル・SPAリゾート開発や、先端技術を取り入れた新しいウェルネスサービスのコンセプトメイク・企画立案の業務を、継続して受託した。特に、「トランステック」<sup>1</sup>や、「マインドフルネス」の考え方と手法を取り入れ、「コロナ中～後」のウェルビーイング・ライフを実現するためのコンテンツ開発に、音、光り、香り、映像、アート等による「五感への働きかけ」を活かす様々なリサーチと考察、検証、試案づくりができたことは、とても大きな財産となった。一方、パートナーシップで仕事してきた会社と顧問契約を交わし、これらの売上で、なんとか3年間を乗り切った。また、実施には至らなかったが、海外案件の温泉利用の通年・屋外型健康増進プールの基本計画案作成にチャレンジし、我が社のテーマを、空間の総合的なデザイン計画に反映させる取り組み機会を持てたことや、NFTにチャレンジをし、メタバース空間上に『SORA NFT ART GALLERY』を開設したことも、このコロナ禍期間の成果であった。



某海外案件 温泉利用の通年・屋外型健康増進プールの配置案  
(提案のみ。コロナ禍の影響で計画頓挫) /2020  
「キャニオン」と「ラグーン」という、立地の景観的特徴を  
空間デザインに活かし、高低差を設けたプール施設内の様々  
なエリアを巡りながら温水・冷水浴を楽しむ過程で、「運動」  
と、「自律神経調整」が自然とできるデザインとした。

<sup>1</sup>「トランステック」：IT（情報技術）に脳科学や心理学などを組み合わせ、心身の成長をサポートする技術、トランスフォーマティブテクノロジーの略称。（Transformative technology =変化を促す技術）

## アフターコロナの光りと願いのメッセージ

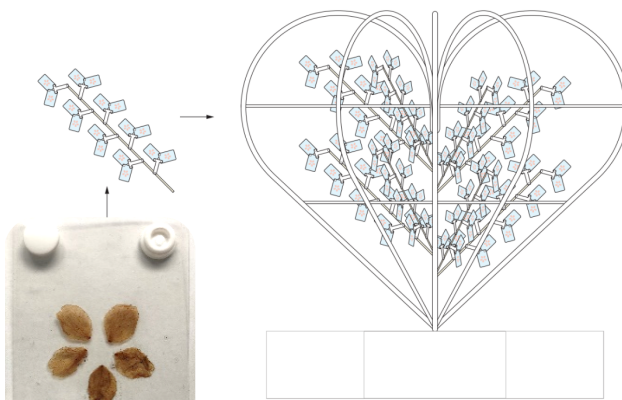
～希望ある未来へ 思いは咲く、輝く～

2023年の春は、希望の春となった。コロナ禍は終息へと向かい、マスクの着用や感染予防対策も個人の判断に委ねられたことで、気持ちが明るくなった。そんな折、感覚を共にし、良きパートナーシップ関係で仕事をしている光景デザイナー 松本大輔氏と共に、1300年の歴史を持つ江戸総鎮守「神田明神」にて行なわれた「明神桜」ライトアップの光と音の演出の企画制作を行う機会を得た。2022年に始まった同ライトアップであったが、事情により2023年は開催できない状況になったため、桜ライトアップの光りを、平和への祈りとコロナからの復興への願いを込めた「希望の光」として灯すことはできないだろうか？との思いから、私の呼びかけで「神田明神 明神桜ライトアップ実行委員会」を編成、協賛社、協力者を募り、多くの方々のお力添えをいただき、満開の明神桜のライトアップが実現した。その初日、ライトアップされた桜を実行委員会メンバーと眺めていると、にわかに関雨が降り出した。

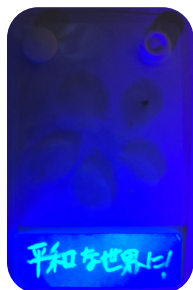


『神田明神 明神桜ライトアップ 2023』  
(キービジュアル) / 2023年

そして、雨に打たれて、桜の花びらが、ライトアップの光りにキラキラと輝きながら舞い落ちる奇跡的とも言える美しい光景が現出したのだ。キービジュアルのデザインイメージが、まさに、目の前にそのまま現われたかのような不思議なデジャヴ感覚とともに、雨音と、光りながら散る桜の花びらが織りなすアートインスタレーションのような光景に、しばし見とれてしまった。本当に美しかった。その舞い落ちた桜の花びらは、会期中、現代アーティスト志喜屋徹氏監修による「サクラ フタタビサク」という参加型アートによって、参加者の願いとともに再び咲いた。



明神桜の散った花びらをラミネートしたカード。  
スナップボタンで「ツリー」に装着。



カードにEVペンでメッセージを書き、  
夜間、ブラックライトによる照明演出で  
メッセージが光る。

『神田明神 明神桜ライトアップ 2023』

『サクラ フタタビ サク』/2023年

アート監修：志喜屋徹

明神桜の散った花びらを集め、ラミネートしたカードに「願い」のメッセージを書いて、境内のおみくじ結び場として参拝客に親しまれている現代アート作品「ハートフレーム」にしつらえたツリー状のオブジェにカードを付ける参加型アートイベントとして実施した。



現代アート作品「ハートフレーム」  
内のツリーに、カードを装着。  
ブラックライトでメッセージが光る。

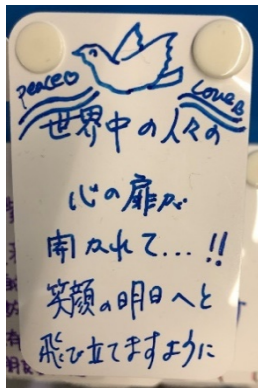
## 今、そしてこれから

～「想い」と「願い」は、いつでも、今、ここにある。そして、未来へと、飛ぶ～

2024年は、元日に発生した「能登半島地震」と、2日に発生した「羽田空港地上衝突事故」という、二つの大きな災害と痛ましい事故で始まった。日本の空に、目には見えない、様々な「祈り」、「願い」、「希望」、「励まし」、「ありがとう」の声の響きがこだましていた。私自身、ニュース報道で現場の映像を目にする度に、心の中で、痛ましく思う感情と、何もできないでいる自分の無力さをもどかしく思う感情が交錯した。ちょうどそのような折、ある大手百貨店のバレンタインデーからホワイトデー期間中（2月～3月）の販売促進催事の一環として、お客様の「想い」のメッセージをアートディスプレイにする企画提案機会を得た。2024年の干支は「辰（龍）」（タツ）である。古くから、龍の現われは、吉兆の前兆と言われている。新しい年のバレンタインデーに向けて、みんなで愛のメッセージをカードに書いて龍に込めて飾り、込められた誰かへの思いや願いが成就する年を迎え入れよう、という参加型メッセージアート作品を、想いを共にする現代アーティスト志喜屋徹氏と制作した。バレンタインデー期間中に、緑色とピンク色のカードを用いて完成した緑龍とピンクのハートのビジュアルが、ホワイトデー期間中には、白色と黄色のカードで白龍と黄色のハートに変容する、「イメージ転換」のある作品としてしつらえ、2期間を通じて、約1500のメッセージが集まった。この「メッセージアート」は、同百貨店本店の創業60周年を記念する販売促進催事の一環として制作受託をした『コトノハアートプロジェクト』以来、様々なテーマのもと、表すカタチを変えてシリーズ展開をしている。心の中に眠る、目には見えない「想い」や「願い」を、メッセージに書くことで「見える化」し、さらに、それをアーティストのクリエイティブワークによるビジュアルや造形に、「込める」、あるいは「結ぶ」ことで、「個」の想念を「集」の想念としてビジュアライズする、という手法を基本としており、この手法は、「ひな形をつくる」で触れた、『東北風土マラソン』で行ったソーシャルアートの取り組みが「素」となっている。作品が完成するまでの過程において、メッセージが集まり、ビジュアルが刻々と変化してゆく（完成してゆく）

プロセスを見せることも、その作品表現の大きな特徴である。

今、世界は、災害、紛争、人道危機、食糧難、自然破壊、地球温暖化、等、様々な危機と困難に直面している。世界の空には、目には見えない、様々な「想い」と「願い」のコトバがこだましている。闇を照らす一条の希望の光りに導かれたい。その光りは、もしかすると、ごく身近な誰かからのコトバかもしれない。たったひとつのコトバが、希望の光りとなり、誰かを救う。たったひとつのコトバたちの沢山の集まりが、とても大きく美しい光りとなり、世界を救う。そんな未来を夢見て、「そらの響き」を世界に響かせるべく、これからも取り組んでいきたい。「新しい共感覚」が切り拓く未来の地平を目指して。



『コトノハアートプロジェクト』の一環で制作した『TOBU TSUBASA』（飛ぶ翼）にて、作品に込められたメッセージ。



New articles in this journal are licensed under a Creative Commons Attribution 3.0 United States License.



This journal is published by the University Library System, University of Pittsburgh as part of its D-Scribe Digital Publishing Program and is cosponsored by the University of Pittsburgh Press.